

『資本論を読む会』第5回目の案内!

【第5回】2019年1月18日(金)午後6時から
会場:支局・社青同事務所において

◎「貨幣の謎」に入っていきます



12月21日(金)の第4回の「読む会」には、7名が集まりました。今回も残念ながら日程の都合で参加できないという方もいました。「第3節 価値形態または交換価値」(88pから114pまで)を読み合わせ、anakさんのレポートに基づき質疑討論しました。ここから「貨幣の謎」に入っていきます。

次回は同じく第3節の「B 総体的または拡大せる価値形態」(115pから)をはじめます。今回のレポート、参考辞書は、支局のホームページに収めてもらいます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」コーナーにあります。

レポーターから

○今回からは、少し難しい言い方ですが、商品の価値形態の問題に入りますが、マルクスは冒頭で「いまだかつてブルジョア経済学によって試みられたことのない、貨幣形態の発生を証明しよう。これをもって貨幣の謎は消え失せる」と宣言します 88p。

○まず「A単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」で下記の表が示される90p。

※亜麻布 20 エレ=上衣 1 着(「値する」との表現) ※第一の形態

「亜麻布所有者は上衣が欲しい」という関係性の式。数学のイコールではない(向坂)

○ここで亜麻布は相対的価値形態(他の商品よってのみ表現される)と呼ばれ、上衣は「等価形態(他の商品の価値表現に材料を提供しているだけである)と呼ばれます 91p。

亜麻布と上衣という二つの商品の関係を通して、これが最終的には貨幣形態を証明するために論証されようとしています。

○亜麻布という商品の価値は、他の商品(上衣)の使用価値で表現される。逆に上衣という商品は、ここでは亜麻布の価値を表現するために使われる等価形態である。

※上の式自体は単純な難しいものではありませんが、表現の仕方は少し面倒ですが、分かるでしょうか?マルクスは、何で、こんな七面倒くさい表現をするのでしょうかネ。

○この節では、2・相対的価値形態として、「その内実」「量的規定性」などが述べられています。ここでは省略しても構わないでしょう(要約が面倒だ)。

○面白かったのは3・等価形態の叙述で、アリストテレスの限界の話が出てくるところで 109-111p。彼は、「しとね(敷き布団の類)5 個=家 1 軒=貨幣一定額」という式を認識したのです。「(こういう)交換は等一性なくしては存在しえない。だが、等一性は通訳すべき性質なくしては存しえない」。しかし家がしとねに対していい表している共通の実態は何か?そんなものは「真実には存しえない」とアリストテレスは述べている。

本当は、それは人間労働なのであるが、ギリシャ社会は奴隷労働だったので、市民と奴隷の労働力は等しくなかった。「人間は等しいという概念が、すでに一つの強固な国民的成心となるようになって、はじめて解きうべきものとなるのである。」

「アリストテレスの天才は、まさに彼が商品の価値表現において、等一関係を見つけているということに輝いている。ただ彼の生活していた社会の歴史的限界が、妨げになって…この等一関係は、どこにあるかを見いだせなかったのである。」

○ビックリピョン!!…第1章第1節で使用価値と交換価値という表現を学んだのだが、マルクスは「これは正確に言えば誤りだった」と言います 111p。この節で展開したように、「商品…つねに第二の異種の商品に対する価値関係、また交換関係においてのみ、この(価値形態を)もっている」のであり、「このことを知ってさえすれば、先の言い方は無害であって、簡略する役に立っているのである。」と言っています。

◎「A単純な価値形態」は、一連の変態を経て 114p 次の節の「B 拡大された価値形態」「C 一般的価値形態」、そして「D 貨幣形態」へと展開されていきます。(レポート anak)

☆参加希望の方は、できれば事前に、事務局または発起人にまでご連絡ください。

※資料コピーの関係がありますので…

